

二十一号 九月十三日発行

# 東大斗争 獄中書簡集

行為という行為がおわかれているので  
いきおいデイレックタントな沼に  
はまりやすい

この沼の底には  
感傷という不意打ちが  
待ちかまえていたから  
気をつけなくてはいけない

目

次

一、八月一八日

東拘より

川口あきら(仮名)一

二、八月二八日

中野より

ゲバ崎通浩( J 斗委)

五

三、八月二二日

東拘より

K  
K(法政大)

九

四、八月二八日

"

奥津久男(理共斗)十五

前略

二、三ヶ月前に出した葉書き、この書簡集の名は「露骨に復讐心をあおるものでなければならない。」と進言したのだが、一向にとりあげてもらえない。その後よく見ていると深い怨恨をふところにした文章もあり見当らず、サテハこの内容にはふさわしからずと判断したかと勝手に納得していたのであった。ところが、快哉！最近テロリスト然とした文章が突如としてあらわれた。

ひそかにわが内なるサディズムを満足させる如き一文は、残念ながら早々に回収されてしまつてここに引用できない。が、あの文章はすべての読者がウンアレだなと思いつかべるはずである。

(バツクナンバーをお持の方は探してみるとよ。)

かくして、獄舎の静けさも、少しほそごみをもつたものになつた。また、ホームランの音に口笛吹く音や、「保釈決定」のニュースに拍手する気配の心もとなさも、仮のすがたと知れた。今さら獄中書簡集といふネームバリューを捨てるわけにもゆかぬのだ。

もうけれど、いまだ東拘の片隈で「歯には歯を」とつぶやきつつ、これが書簡集に採用されることを望むものである。

若きテロリスト君／君の賛同を求める／

だが君なら「歯には歯」でもあきたりぬと云うかも知れない。

◆ ◆ ◆

ところで諸君。小人閑居して不善をなすにもすべて行為とい

う行為が奪われているので、いきおいディレツタントな沼にはまりやすい。この沼の底には感傷という不意打ちが待ちかまえているから気をつけなくてはいけない。

「牢の中では精神主義、外へ出れば社会主義」堺利彦という便利なしくみになつていればいいが、そうはいかない僕らは、とりあえず、かなり必至になつて世間や世界のこと首をつつ込んで精神主義に足をすくわれて、感傷の沼へ陥らぬようにしようではないか。

およそ商業新聞といふものは、ふだんはロクな記事も書かず、決定的な時には休刊だつたり、デマを書くものである。

かの一九六七年十月八日は日曜日で夕刊がなかつた。かくして翌朝のブル新はそろつて警視庁情報に学び、これにのつとり「客観的」な山崎君ぎよ殺の凶犯人説を流したものである。その後、日大の五百川、中村君が「犯人」扱いで紙面にあらわれ彼らの不起訴II犯人デツチ上げ失敗の事実は、ブル新には何の価値もなかつたとみえる。つまり、決定的に重要なこ

とに關してはウソを云うか黙殺するかどつちかなのである。ということをふまえて、僕はすべてのブル新の記事の90%を疑つて読むことにしている。あと10%は始めから事実無根である。

それにも拘らず何十遍も、くり返し目に入る見出しは、幻の楼閣を映し出す。一ヶ月を越して今だアメリカ市民を熱狂させ、

日本の国際テレビ中継会社をボロもうけさせている「アポロ」がそれだ。

「やつぱし、人類の偉大な業績なんだろうか」と一瞬でも想つたら敗北である。

ウォール街のマーケットティングの粋を集めて売りまくられ、もとを取つた大統領ニクソンの猿面冠者の笑顔に敗けてしまう。この「偉大な業績」に実際ダイナミックな命名をおこなつたのは、佐渡二夫君であつた。

「私はそこにアメリカの“死想”を発見した。一九六九年七月二十一日、ニクソンと世界の支配者は月面に自らの墓碑名を記したのである。」（前進四四五号）

これで、すつかり、あの荒涼たる月面に、風がないので横木でつるされたスターズ＆ストライプスの世界史的意義が明らかになるではないか。

また佐渡二夫君の文章について言えば、獄中斗争と七〇年安保の関連を極めて明解に意義づけているすぐれたものだと思う。その点については、また改めて書こう。



まず、こつちのイデオロギー武装がちゃんとしてるか、かなり危機意識をもつてとりかからなくてはならないのじやないか。たとえば、議会主義の演壇に長々と寝そべつてはいる社共を捨てて駆け参じたくなるような斗いの質とは一体何か。

「安保粉碎・日帝打倒」その政治・経済的過程はどんな回路をたどるのか。イデオロギー的武器は何か。対決局面は何時？

如何なる形をとつて進行するのか？

具体的な政治過程はともあれ、少なくとも「帝国主義打倒」の勝利への錨は十七年の革命が教えるだろう。

ところで僕がここで皆に伝えようというのは、それ程大上段に構えた問題ではない。

「僕は僕の友達が牢屋の扉を開けに来てくれるのを一日中待つていた。」とは、一九四五年八月十五日の羽仁五郎の回想である。僕はこの老歴史家の感覚が気に入つてしまつて、友達への暑中見舞に何度となくこの名言を引用している。

「革命の現実性」ということについて語るだけならそう難しいことではない。しかしこの歴史家のようになら「学者」でありながら革命の「現実性」を感受する知性は稀じやないのか。

彼については近代主義者にすぎないとか、代々木臭いとかの好みがあるらしいが、僕は板倉元朝君の云つたように、こういふ老人が絶対的に少ないことが問題なのだとと思う。

日共の問題についても、「公式主義者」（羽仁五郎の自称）らしく戦争を阻止しえなかつた「革命党」として獄中十八年の権威主義には屈していない。獄中十八年の潔白は消極的な反戦論はいかない。

者のアリバイになつても「革命党」の旗印としては無力なのだ。この点をしつかりおさえておかないと、再び現在の日共の如き「自衛権承認」「独立＝戦宣布権の獲得」といつた出たらめに陥るのである。

僕の友達で「戦後革命の敗北」という本の題を見て「へツ！」と軽蔑的な笑いをした奴がいた。戦後民主主義のはなやかなりし頃にその粹をつめ込まれた僕らにとつて、世界史を革命史として読み直すというコペルニクス的転換は、時として先のような抵抗をひきおこすらしく。しかし、革命的マルクス主義の実践者を自認するわれわれとも、本当に八月十五日を「日本帝国主義が打倒された日」として想起するのはそう易しいことはない。帝国主義という圧倒的な物質力のその崩壊を見、また、その物質力に伴つていたすべてのイデオロギーの崩壊過程というダイナミズムを感じしつつ、革命的立場を現実的階級斗争の最終階級まで押しすすめること。そういう試練へ向うことが、「八月十五日の再現」なのだと思う。

一度目の八月十五日は、アメリカ帝国主義による日帝の打倒であつた。しかしこの度の八・一五へ向つて、テキの実体的基礎たる世界第三位の生産力は、われわれにとつて疎外労働の更なる密化をもつて、プロレタリアートの普遍的基礎をうち固めている。この弁証法的関係を「七〇年の選択」をとらして、一挙に表面化させ、政治斗争化させていくのが「安保粉碎」の組織路線といえるだらう。

この過程で「世界第三位」を自らの生活に何らかの形で見出し

ている人びとを帝国主義の側からどれだけ。それが、実体的に云えども反政府デモにひきずり出すことができるか。

ここで革命の主体的推進者＝党が問題になる。

ところで、われわれが耕すべき畠は一体どうなつてゐるのか。この一般的疑問への一般的答が、先日の読売新聞に載つたので見てみた。

二〇才から七九才までの日本人三千人を抽出して行つたアンケートである。それはこういう解説つきで発表された。「安保に対する国民の意識は、予想外の多様化を示している。まるでヤマタのオロチのように、同じ日本人の胴体のなかから数限りない考え方をもつた顔と頭がのぞいてゐる……」悪名たかき読売の「予想外」なのだから何かいいことがあるに違いない。と僕は思つた。そう思うと、ヤマタのオロチの比喩も何となく「妖怪」（例のヨオロツバをうろついてゐるという奴）めいてきて小気味よい。

しかし、アンケートといふものはそもそも「予想」や「社説」の裏づけのためにしくんだものであるから、質問なども不意打ちや陥し落やドウカツや被害妄想をかきたてるように組立ててある。

まず出だしはこう「うぐあい」である。  
「日本の安全にとつて脅威となる国」……國の名がならんでゐる。「日本に対し軍事力を背景に不当な要求を押しつけてくる国」戦争体験の有無。防衛問題への日常的関心。等々ざつと

十問近くこの調子でせめ立てる。

ただ、これは一般的に被害妄想に陥むのを目的としたものではない。

この次に統いて、自衛隊、米軍基地、日本の核兵器保有と日本をとりまく強盗のイメージなどあつた「戸締り」の答えが出るようになつてゐる。

そのあと、安保体制への質問十問ばかり、既成政党の安保政策について五・六問、最後は「行動」に関する質問である。

この中で、最上段の見出しに

「國を守る気持」持つてゐる人八五・五%といふのはショッキン  
グだ。これが自民党の云う「国防意識」なら恐るべきことだと内心冷汗をかきつその八五・五%の中味を見た。

そして二度おどろいた。

正統派たる「命がけ」が二〇・二%これはありうる数字。

だが「経済的に協力する」九・六%

「生命以外のあらゆる犠牲を惜しまない」二一・〇%

「精神的に協力する」(2)三一・五%

こりやあ一体何だ……と読売新聞解説記者は云つたに違ひない。僕もそうつぶやいた。「命がけでない」五一・五%といふ数字

に対してもそなたが、こういつた選択肢を考えついた人の「現

実への密着度」におどろいた。

国防意識はもつてゐるが、それは「精神的に協力」することだというヤマタのオロチの一つの頭である。

その別の呼び名は「経済獸」というのである。

かくて、大日本帝国の遺産「愛恩」は、極めて合目的的理論的に日本の商工業自営者群十七%の人々によつてうけつがれてい

る。ブルジョワジーは、驚くべき高度成長の下でヌクヌクと育まれてきた「經濟獸」の「生命以外」「精神的に」「經濟的に」戦争協力するという告白をともかく協力には違いないと安堵して、先の見出しどとなつたのであはうか。

次にわれわれにとつて少しでも関りのあるのは最終の一、三の質問である。

◎今年の六・一五「反安保市民デモ」のような「暴力抜き」の行動に誘われたら参加するか。という間に、大都市住民の二〇・五%が参加すると答えている。

質問の仕方にかなりインチキがあるのだが、それでも「社会党の……」とか、「共産党の……」とかあるいは「革新勢力の……」六・一五でないことははつきりしている。

われわれの耕すべき畑は實に広大かつ肥沃であるといふべきか。次の質問の答は、その二〇・五%の人々の多種多様な行動がよく示されている。

◎来年六月に安保条約を続けるか、やめるかなどであなたの意見に反した決定がされた場合、どんな態度をとるか。

つぎの選挙で意示表示

あきらめる 三二・三% 十四・三%

○暴力によつても断呼反対 ○・五%

○政治スト ○・九%

○デモなど大衆行動を積極的に 三・六%

○清願・陳情などルールによつて 七・八%  
○署名活動など地域住民へアピール 六・二%  
○国会解散を要求する 五・五%

これらの行動の多様さは、その答えをした人々の実現可能性を物語るものである。そして、政治的激動期には、これらの多様な行動が重り合い、競合し合つて大河をなすのである。

これがヤマタのオロチのもう一つの頭である。

そして、これは大日本帝国から切断されて、戦後民主主義のワクの中で育まってきたものである。

重要なことは、これらの戦後民主主義の遺産が、社会党によつては、もはや防衛不能になつてきた事情である。都議選での地

八日二八日 中野より

ゲバ崎 通浩（丁斗委）

「商業メディア以下の存在に墮さないことを…」と/or 私の警告にもかかわらず、恣意的カットを続けていたる発刊委へ

もし今回これが三度カットされるようであれば、何らかの対応策を考えざるを得ない。それと言うのも、例えは一つには、こ

の書簡集において中核派が三度に渡つて昨年一月の佐世保斗争に關して、極めて悪質な許し難いデマコギーを發していること

に対する我々の事実問題についての最低限の主張までが采く力ツトされている。これはなぜなのだ？諸君達の主体的編集方針

とやらをお聞かせ願いたいのだ。

商業ジャーナリズムの投稿欄でさえ、ちゃんと断り書きがしてあるだろう。

例えは「採否のお問い合わせにはお答えできません。」とか

君達もそういう主旨なら、その通りきちんと断り書きをすべきではないか？

まず最初に、佐世保その他の斗争に關して、歴史捏造が、まさしくヘゲツベルスの嘘の哲学／流に巷間に蔓延している以上、

すべり的没落はこれを雄弁に物語る。だが、日共の「独立一改憲（第九条破棄）－武装資本主義国家」という度し難い祖国防衛主義にすべて侵されつくしたわけではない。

読売のアンケートは、また、既成政党による「安保政策」の論議が全く空中戦であつたことを一方で暴露している。

われわれの圧倒的な飛躍と、党的資質の獲得へ向つてすべての陣容が整い始めてゐるようだ。

学友諸君！

未来はわれわれのものだ。

勝利に向つて頑張ろう！

この事実問題からはつきりさせておかなければならぬ。

本書簡集においても、三度、このデマコキーが流されている。

例えば「十九才になつて女の子がほしくなつてゐる広大の中核君」の如く、自分でも認めてゐるよう、学生運動に参加して半年、ということは昨年一月の佐世保の事は何ひとつ知らない連中までが喚いてゐるのだが、何のことではない、彼も又例の二円で売られている革共同「重要」論文集から、そつくりそのまま、まるで書してゐるに過ぎない。前記論文集の記述「社青同解放派の学生諸君は社会党指導部の右翼的統制に屈服し、その忠実な親衛隊として警官に向かつてではなく、中核派に向かつて「団結」する」という構図を示したのであつた。この構図は、今後の労働者運動の前進にとって、不可避な綱領的・組織論的問題を佐世保橋的予知せしめたのである」（前進からの転載）

数日前手元に入つた前進縮冊版によると彼らが事実歪曲、歴史捏造を開始したのはほどほどのさめかけてきた三月以降のことなのだ。

誰しも認めざるを得ない確実な客観的事実を列記する。

（十七日、平瀬橋の全党派の武装斗争、十八日、佐世保橋の同じく全党派のスクラム斗争の事実問題に関しては問題が生じてないから省く）

①エンタープライズ号の入港当日十九日、解放派、関西社学、ML等は（前日佐大の寮で二、三時間休憩したのみ）入港実力阻止の武装斗争を早朝の佐世保橋で二度に渡つて転回したこと。  
②このエンブラー入港という決定的な日、中核派はいかなる理由

に基づくのか、はたまた寝呆けたのか二時間以上も遅れて到着し、入港阻止斗争に間に合わなかつたこと。（その日の夜、ブントMLは早々とカンバをして関西に引き揚げる）  
③二十一日、松浦公園社共二万人集会において佐世保市民が民青行動隊からとりあげたプラカード、コン棒等が偶々手に入つたことにより、急拠、中核派はその十五六本足らずの角材で武装するに至つたこと。（中核派はその日武装斗争の方針など出していた等と強弁するのではありますまい。もつとも中核派ならやりかねないとは思うが…）

④そして既に、佐世保橋上で、三、四日の至近距離からの放水に耐え、強固なスクラムで機動隊の壁に数度、突入していく我々解放派と青ヘルメットの長崎大の学生部隊に対しても「日和むな！」と悪罵を投げかけ、「ゲバ棒を持たないのなら道を開けろ！」と要求して撲りかかつってきたこと。（機動隊の壁を隔てることわずか五、六回という、まさに国家権力との接点において。現に五、六人（私を含む）はこの衝突で負傷したのだ。）

⑤社会党の宣伝カーは確かに、中核派に角材を捨てるよう言つた。我々は中核派の武装が必然性がなく、全くオボテニスト的で場当たり的で十九日以来の方針のジグザグを批判しつつ独自・斗いを展開した。念のため、はつきりと言つておくが、権力に対する中核派の武装の解除行動に出たりしていない。その後我々が橋の右側に寄り、中核派が本氣で武装デモを敢行する

なら、その間はあつたのだ。我々との衝突の際、市民に「棒を捨てる！」と言われてわずか四、五人が権力にちょっかいを出したのが実状ではないか。

⑤二十三日、我々は最後の力を振りしほつて、基地突入抗議斗争を佐世保橋で展開し、一方中核派は高台にある十郎原団地での社民と罵倒してやまない社会党のエンブラー「追い出し」集会に参加し、「二度と来るな。」とシユプレヒコールしたという。（これはフクニチ、長崎時事等の地元の新聞ばかりではなく「前進」にもちゃんと書いてあるんだよ。）

その他二十一日には京大の赤松君など四名が浅瀬を渡つて、金網を越えて基地にもぐり込み、中核派の旗を振りつつ「我々は遂に勝利したあ」と叫ぶ、階級運動の团结とはほとんど無縁な売名行為的ハブニングの一幕もあつた。ブラウン管の「主役」ともなればの「見せ場」だつたよ。

以上の事実に関して、いかなる報導機関の情報によつてもいい、右の事実をくつがえすに足る新たな事実があれば、それを挙げてみよ。

以下は十六、十七号の中核ブントの売り言葉に対する買ひ言葉であることを予め宣言しておく。マズ東拘の中核君小田忠良（仮名）君も言う通り「水に溺れないためには泳ぎ方を学ぶのが科学的な態度」なのだが、どうも君のドイツ・イデオロギー（水に溺れる云々：）の比喩アナロジーをみてみると、君の理解はどうなつてているのだろうと怪しまざるを得ない。

「感心なドイツ人は水に溺れるのは重力の思想の呪縛があるか

らだと考え、重力の思想と果敢に斗つた」訳であり、「大学斗争は帝国主義とスターリニズムの虚偽のイデオロギーの支配に対する斗争」と戦略化して大衆に語りかける君達は感心なドイツ人を防衛をさせると我々が言えばそれほど無理があるだろうか。

階級運動における大衆組織化とは大衆が如何に活動すべきなのかの必然性を彼自身（生産関係における位置）社会的存在構造において知らしめることが必要なのである。少くとも階級的根源的エネルギーをひき出すためには誤解を恐れず更に言うならば大衆はイデオロギーが虚偽か真実かの判断で活動するのではない。

例えば、虚偽のイデオロギーを暴露し、眞のイデオロギーを対置させることでスターリニズムは止揚できない。又、そこで君達は、この害悪なイデオロギーを流す連中を物理的にも粉碎することを考えているらしいが、これでもスターリニズムは止揚できないし、逆に新たなスターリニストが誕生する仕組みになつていいだらうか。

スターリニズムを支える社会的物質的基盤を掘りくづす活動、（労働者の階級的独立）労働者階級の階級的政治支配能力獲得への活動）その過程でスターリニストとのイデオロギー斗争が必至の課題となるのは無論のことである。

大学斗争の意味は現実の資本の諸活動への教育過程の包摂（絶えざる競争を通じた学生相互の分断、対立、孤立より高級な労働力商品への自らの加工）専門白痴への強制による学生

大衆のへ痛み▽を発射点にしつつ、この社会的隸属を解き放つ  
斗い（階級支配の社会的経済的基礎を攻撃する斗い＝社会斗争）

を内容的に普遍的に発表せしめること、そして政治的頂点へと  
ペクトルを据えた対政府中央斗争への発展、結合を計る目的意  
識的活動にある。

これらの前衛主義的発想は、例えばこんな風にも現象する。

「参戦国化反対、沖縄奪還、戦後民主主義の防衛」等のスローガンがプロレタリア国際主義的階級的立場に立つたスローガンでないのは何よりも革共・マル同は知っているのだ。このスローガンを唄える時、階級的立場は革共の頭の中にあるのだが、革共が指導している限り安保粉碎、日帝打倒へ結合（多くの場合短絡）せしめ得ると考えてゐる。代々木の場合においてもパルタイくらいになれば、現在彼らの掲げる大衆運動のスローガンがプロレタリア的でないのは当然気付いてゐるし、百も承知の上で、にもかかわらず日本共産党が「前衛」として存在する限り民族民主連合政府から二段階的に共産主義革命へ発展せしめうるとタカをくつてゐるのだ。

「いや中核派は現在的に安保粉碎、日帝打倒を掲げてゐる」と言うだろう。しかし、代々木も又、綱領その他の中で帝国主義打倒プロレタリア独裁の旗を現在的に唄つてゐる。

又、東大斗争において昨年暮の政治権力の中枢からの大学閉鎖の恫喝が下された際、多くの学生大衆を現実的問題として全共斗運動から脱落せしめ、スト破りをしてでも授業を受けたいと思わせ、そして卒業させていつた力こそ、まさしく資本の社会

的権力なのである。

この資本の下へのより一層の隸属を突破するためには、国大協自主規制路線、ブルジョアイデオロギー、スターリニズムのイデオロギー批判を徹底することでも、又「今や革命か反革命かの時代に突入した。後は帝大解体まで斗うか否かだ」と小ブルの決意表明をせまることでも決定的に不充分であつた。

自らをより高級な労働力商品として専門性を附与し又留年したのでは学生生活を続けてゆけなく売ることを余儀なくされた存在としての学生が一般的である場合「自分で否定するのかどうか」の呴喝だけでは運動は進展しない。再び「職務給、能率給、ZD運動、モーレツ特訓等を通じた労働者相互の悪無限的競争関係へと回帰するのみである。産協路線（産業合理化運動の教育過程への適合）粉碎のスローガンの革命性はここにも表われている。もつとも産協路線を個別資本を教育機関の結合とか反産協斗争を大学問題への自己完結であるとしか捉えられない連中にはわかるはずもないが。

次に17号の恥の感覚を全く知らない小管のブント君

「僕達は決して東大斗争を支援に来たのではなく、東大に革命をするため（傍点そのまま）にきたのだということを東大の諸君は知つてゐるのだろうか」「僕達も領導していくつもりです」「我々が勾留者として存在するのは（東大の）諸君を領導しなければならないからであり……」等々と、この大上段に振りかぶった「革命家」は全体を通じて、まるでかつて東大にブントが存在しなかつたような口振りがマズ気にかかる。

青年へーゲリアンといはレツテルはどうやら、我々にはりつけられているらしいが私もかなり長い間運動をやつているが、このレツテルを初めて知つたよ。

しかしどう考へてもこれは、民青の諸君達にトロツキ主義者のレツテルをはつてゐるようをものだ。政治ゴロなら、もつとそれらしいレツテルのはり方を勉強すべきだよ。君は一体、老へーゲルから青年へーゲル派への脱皮、そして青年へーゲルに一時身を置いたマルクスのへーゲル観念弁証法の止揚の基調を何だと思つてゐるんだい。

昨年から、ブントは「解放派の遅すぎた分解」とか「この解放派の解体を促せ！」とか他党派の分解に主觀的願望を託し、自らの党派の延命を計らんとしているらしいが、このオブティニズムは破産したなあ。

解放派は絶えざる野合、集散を運命づけられているスターリニスト、トロツキスト諸派を組織論的に根柢的に止揚した地点に立つてゐるのだということを今こそ認識すべきではないか。

「僕達（ブント）」とつて反スタ観念論者、青年へーゲリマンと中核MLとは、やはり一線を画する」などと君は言つてゐるが「反スタ」観念論者と「反スタ」肉体派とが組織戦術（革マ

ルさんの三段階論を借りると）以下の次元においては両極端的対立を示しながらも、組織論、戦略論的根柢においては△双生児▽たるゆえんを物の見事に立証してゐるのを気付かないようではブントの先も長くはないと思うよ。君達より宗派としては△中核派の方がよほど進んでゐるのだ。

それから、「もう一度マルクスレーニンを読んでほしい」とか「日和らないでもらいたい」などと君は一体誰のセリフを吐いているのだ。5・31斗争はどうかブントが売り物にしていたアスペクト斗争はどうか。？

「組織された暴力とは反戦青年委（ルンプロ）と学生」（理論戦線）などと公言して憚らない党派、階級支配上の国家と市民社会の二重性に気が付かずそれだけならまだしも国家△階級抑圧の暴力装置としてか掻えられない諸君から「マルクスを読め」となどと言われてもビクともこたえないよ。

又、別のあわてん坊ブントが大阪から「行動委員会運動なるもの、これは自然発生性への拝跪した議論」などと早トチリしているが、この男、きっと早漏にちがいない。最近のブントが「あらゆる大学に学園評議会（行動委員会）」などと我々を内容抜きに 窺し始めたのを知つた上で言つてゐるのだろうか？

独居の暑さで頭がイカレてもうたのとちやうか。  
党建設を抜きにソヴィエトを語つてゐるなどとデマコギーを飛ばすんじゃない。

※※※※※ 八月二二日 東拘より

K・K (法政大)

裸のまんまの太陽がやつてきて、コンクリートの壁が燃えている。イエイエ、決して冗談や誇張ではなく、全くそのとおり

に感じるのです。僕等にとつて「宝物」に等しい婆の実在感はこの暑熱に触かされ、勢い稀薄になつていきます。それに、過去の時間は距離がなくなり、記憶の系列は交錯し、時間性はますます無意味になつていくよう。

それでも、最近では、朝晩さはやかな風が足元を撫ぜてとおることがあります。（便器兼用の椅子に腰かけると、ちょうど足元の辺りにある十センチ四方の通風口から風が入る）しかし、抽象された論理は相変らず、力がなく“砂上の楼閣”といつたふうに頼りない感じ。感覺世界が制限されるというのは“人間的特質”を奪つてそう、どれ程、非人間的処置かということに、改めて思い入つています。

この拘置所には、各舎を接ぐ一直線の大廊下があります。

この廊下は、面会や、医療を受けに行くとき、必ず通るのですがこの廊下を歩いていると、ときどき、タバコの煙が漂つてくることがあります。そんな時、あれから、七ヶ月たつた今でも18・19・安田の連続した残像が、実像のようなリアリティーで浮かんでくるのです。（講堂でふかしたタバコの印象か、それとも、催涙ガスの臭いを連想させるのか、とつさで分らない）十八日の早朝、講堂の横に突き出たバルコニーから見下す機動隊員は田虫そつくり。その群のなかへ×××を投げてやるとバツと群れが割れる。幾度も繰りかえしていると、まるで俺があいつらを操作しているんじやないかといふ錯覚にとらわれてしまつたりする。そして、翌日、二階が破られ、三階へ通じる階段に黒っぽい影が表わしても、驚愕、恐怖は特別感じない。

残り少ない××をすでにつけたりしたのに向かつて投げつけながら、周りの連中とインターを歌つてると、目くるまく、恐怖も、あの体中のも孔が全開しているような緊張もなく、無限の安逸を感じていた。

胸に猛烈な衝撃を感じて、うしろにふつとぶまで、この余裕は一体何 NANDA なんて、冴えた頭ん中で自問していた。

幽やかな地殻変動は少しづつ、確かにさをましているような気がしないかい。一度、生まれた亀裂は元に戻りようのないのが自然の摂理。10・8・佐世保一王子一新宿一東大とうちづく絶望的疾走。狂氣と背中合せの全力疾走。組織の（だが当然）の勇気（或る人達はパラノイアと嘲笑するけど）

深かつた民衆の怒り。これら一連のエレメントはアマルガムに安保前年を形象する。

今年の六・一五は画期的なものだつたけど、僕がはじめて参加した五年前の六・二五デモー現在、僕の房の丁度、下あたりにいる今井君が當時、三派都学連委員長としてアジテーションをしていたーは僅か五百人ばかりのデモ隊が日比谷公園入口に阻止線を張る警官隊と激突する。すると、先頭で警官に背を向けた指揮者の上半身が浮きあがつた姿が茶色の砂ボコリが混じつた陽光にボンヤリみえる。“アーベンをみてしまつた。”というのが、そのとき始めてのデモの感慨だつた。と同時に、次へのデモにも又、きてしまらんじやないかといふことも。

“美意識で塗りこめたような小説が書いてみたい。現実には幾

ら探しめたつて見つかりつこない空想美を”

そう願つた筈だつたが、中途半端で質の悪いロマンチストには灰色の現実をバラ色に塗りかえる豊かな想像力はなかつたといふことだらうか。勿論、美的觀念世界に塔を築く精神の緊張・自覺も。

そして、翌日には思考、感覺に隨分距離を感じつつ、自治会で觀念語の洗礼を浴びる結果となる。むづかる僕のなかの「赤子」は、微温的な、ソウーフォイエル・バツハの「愛の園」的雰囲気に辛うじてなだめられる。

そんなふうに「見えない」僕に、奥浩平の死は、千里も万里も彼方の死だつた。當時「組織」を突きつけられていた僕には暗い真ツ暗闇のイメージを奥の死をオブラーート代りにしようとしていた。行為でしかない卑俗な死「抹殺」としての死情緒でまぶされた死。

ひまるところ、幾ら手にすぐつても、こぼれてしまう「現実」。この意識の混濁は何だ。そう言えば今まで、敗北の予感とそれから逃れようとする試行（思考）が全てでなかつた。高校時代、三日とあけずチンピラとイザコザを起こしたのも俺は敗者なのかも知れないと言つた意識を払拭するためでなかつたか。ヘーゲル的「自我」被害妄想

去年のはじめだつたか（死者よきたりてわが退路を断て」という標題の自主プロ映画が大仰に宣伝されていたけど僕らにとつて、そんな凍結した倫理感とは無縁であつていい。

それに、（運動をやるのは“生き死にを”自己完結したから」「

といつた葉隱れ的なものであつてもならぬ）だらう。

かつて、悲哀のどん底にひたつてやろうと Kill myself を試みたけど、点滴ピンをガリガリ喰つて了つた僕に隣べツドで Sailor のオサンが言つたつけ「今どき女子に振られた

からつてそんな真似するのは随分クラシックだな。俺は五日程前醉つぱらつて桟橋から海に落つこつたんだよ。ほんのかすり傷だけど入院費は保険が効くので只同然だから、この際、ゆっくり休養してやろうというわけよ」。底ぬけにカラツとしたニヒリズム。救いようのないニヒリズムはマルクス主義だ。とい

うようなことを言つたのはハイデガーだつたか（？）

◎丁度、今、書簡集十七号が手元に届いたのですが開いてみると案の定第十三号解放派「半セクト」諸君への辛辣な反批判が二人の人から寄せられていました。実をいうと十六号まで「半セクト」君への反批判が全くなかつたので、それでは僕がとう氣になつていたところでした。でも「反批判」は中止しないでこのまゝ書きつづけることにします。先ず始めに僕は解放派に対しても生理的ともいえるアレルギーを持つてゐることを明らかにしておきましょ。

それは、他でもなく僕自身の幾つかの体験が蓄積したものなので当然罵倒じみるのを許していただきます。

解放派といふ党派の無節操ぶりを証すに必要な例証は無尽蔵ですが天下衆知の事実として法大处分斗争での右センカイ、一月佐世保橋での機動隊と学生、労働者との間に設けたピケット・

ラインとあります。とりわけ解放派の卑少で愚劣な党派性を示すに最たる事件に昨年六・一五から二日あとに起つた法政でのことがあります。それは六・一五と関連して、「法大中核派は他党派占め出しをやるのはないかと勝手な推測をした彼等（法大解放派）はどうせ占めだされるのなら行きかけの獣賃ならぬ逃げ出す前に痛めつけといつてやれとはかり、自治会室を襲つて来たのです。僕もその被害者の一人でしたが、その襲いぶりも「退路」を気にしてのことなので、まさにウツブンを晴らす、といつた程度で終り、そゝくさと自ら学外へ出て行きました。組織運動路線上の対立を個人的怨恨に解消して満足するやクザ的感性。日常不斷の讐古も、所詮元をただせば、そうした俗悪な感性なるが故に「プロレタリア統一戦線」などと大風呂敷を広げても、現実の統一戦線、統一行動は全くのプラグマチズム。寄らば大樹の陰式のカメラオン的変り身。

切て、解放派の本質は突いていた筈だが感情的罵言ばかりでは非生産的ですので「半セクト」君の「中核派理解」の誤解を解きたいと思います。

①「この本の著者は「大学斗争は帝国主義とスターリン主義の虚偽のイデオロギーに対する人間回復の斗い、マルクス主義回復の斗いである」という（僕はこゝを読んでいて水におぼれながら）と重力の思想と果敢に斗う「感心をドイツ人」を思へ出した。

②「スターリニズムといふのは人間を支配している（）一つのイズムではなくて人間的結合の不充分なのだ、分並（就中

精神労働と肉体労働の二考へる部分と行動する部分の分離、潜在的敵対）と私有財産の秩序の刻印を受けたそのようなものとして「個人生活の対立」をしていない、不充分な人間の結合のあり方なのである。『国家は個人生活の対立のうちにのみ存在しうる』組織＝団結の中に「個人生活の対立」を及んでいるが故に、國家を止揚することの出来ない組織のあり方、それこそがスターリズムの土台なのである」

①について「半シンパ」君の批判の方法は批判すべき対象そのものを歪曲して理解しているようです。こゝで「批判者」の主張しようとする点は「イデオロギーの物神化」乃至、イデオロギーとその物質的基礎とを分離したところの「イデオロギーの自己運動」ではないかと思う。

だが逆に「批判者」がそうした批判方法をとることのなかにイデオロギーとその物質的基礎の機械的分離が無自覚にはばまれている。

何故ならマルクス主義からその唯物論体系をぬきとつて、宗教的ドグマ・ヘーゲル的觀念運動として前提しない以上、「自分自身の斗いの根拠である自分自身の現実的矛盾」とそのイデオロギー的対称化は同一化されていなければならない。そうでないとイデオロギー的対立が、現実的矛盾の感性的把握にすりかえられてしまふ誤謬を生みます。

②についてですが「人間的結合の不充分なのだ」というスターリニズムの把握は甚だ曖昧モコとしています。「プロレタリア

的團結の不充分性」というのでは節のないノッペラボウなスターリニズム理解です。スターリニズムとはマルクス主義の歪曲形態としてあり他の何者でもありません。歴史的にはロシア革命の変質と対応しているのですがですから市民社会の分析視角では当然はみ出します。

プロレタリア権力樹立後の過渡期社会に発生したとすることを見落してはならないと思ひます。

政治戦略的表現を与えると一国社会主義を理論的根幹にすえ自國の官僚的支配機構の確立と、國際共産主義運動の「革命ロシア」への国境守備隊としてあります（そして、それが現在的には「平和共存形態」で政策的遂行がなされておりその日本的戦略適用形態が二段階戦略として顕現している）

ここで、今一度繰りかえすと、スターリニストがスターリニズムを正統派マルクス主義としてあくまで自己を貫ぬこうとする点に社民などと異なる根本的特質があります（社民とスターリニズムの違いは「社民」が貢労労働と資本のワク内にしか、存在基盤がなく、帝国主義が倒れれば共に倒れるという関係であるのに對し、スターリニズムは全く違うということです。（蛇足をがら、革マル派がソ連官僚を「社民化」したスターリニストをどと既定しているが、かりに比喩だとしても、彼らのスターリニズム理解の底が知れる。チエコ武力侵入はどう説明するのか、比喩としても間違つてゐる。尚革マルのスターリニズム理解とは、その本質、一国社会主義論、その実体が、ソ連一クレメンツ官僚、中国一北京官僚といつた実体主義的なものであるが

この傾向は彼らが情勢分析の問題意識が全くないということに関連している。即ち、現代世界において、帝国主義が複合的にいかなる發展過程にあるのかということはぬきに、「反スタ」を外から接木（適用の論理の抹殺）して満足するという立場に転落しており、これは、結果として階級斗争の外在化として顕在する）

現在、スターリニスト国家としても世界史的基礎をもつて、物質的に存在しているスターリニズムが人民抑圧として帝国主義の補完的役割を果たしている事実に対し「スターリニズムといふのは、人間を支配しているイズムではない」というのでは、いはば「体制秩序派」といつた一般的把握にとどまりその本質を見失う結果となります。

勿論、反帝ということが即、帝国主義から解放されるというのではないと同様反スタとはスターリニズム的疎外（その派生的性格を概活すれば、マルクス主義の客觀主義化その裏がえしてのドグマ化。權力！党の官僚主義化令大衆の手段化、民族主義）と自覺的に對決すると同時に、反スタの斗いを反帝国主義に一面化するのではなくスターリニズム国家打倒として、いはば、一個二重の斗いとして措定しなければならないと思ひます。

その点、解放派はいはずもがなですが東大全共斗の傾向として、スターリニズムに対する本質把握の甘さは、東大斗争の実体構造についての無認識につながり、結果として、スターリニストの跳梁を許す面があつたのではないかでしょうか。

最後に、解放派諸君が他党派批判に際して最も常用する言葉に

“ブルジョア的”といふのがあります、それは自己に向かつて発せられるに最も適した言葉ではないかと思います。

それは「二重権力的團結」（ロシヤ二月・十月のワイ小化）、社会権力（本質、実体、機能といつた権力の無既定的概念化）を夢想し、ブルジョア社会でプロレタリア権力の可能であるかの錯覚に陥る。プロ革のワイ少化であり、プロレタリアの

「現実存在」無視につながる。これこそインテリゲンチャの観念的自己疎外の典型ではないでしょうか、（尚解放派の自己完結的を初期マルクス）引き移し疎外論は「青年ヘーゲル派」との酷似面の指摘と関連して次の機会に展開したいと思います

P・S 「半セクト」君！「僕は、自分の考え方で他人を動かすのも嫌だが、他人の考え方で自分が動くのも嫌なのである。だから、心情としてはノン・セクに近い」というのは「組織者」でなかつた以前の君を否定的に総括したことと矛盾するのでありますか？「政治とは他人に無責任になることだ」「だから政治家というのは信頼できない」（唐牛問題）と語つたのは大江健三郎ですが、僕らは政治・国家（ケワルト）否定の政治の意味をへ現在直下吟味し、大江的インボテンツを乗りこえるべきだと思います。

## 母への手紙

（前略）先日は面会、差入れに来ていただき感謝しております。何から書き始めて良いものか迷つてありますが先ずお詫び

をせねばならないでしょう。礼子ちゃんのお手紙もふくめて幾通もお便りをいただきながら一度もお返事を差し上げなかつたことは非礼であつたと自戒しております。とは申しても生來の怠情がそうさせたばかりでなく思案した末のことです。面会の折りにお伝えしたように甚だ勝手を言い訳ですが僕の方から返

事を出さないということが最も良い「交通」ではないかと判断したからです。その理由については面会のときお話ししたところです。しかし僅かな時間なので充分納得していただけたかどうか疑問ですのでお手紙でお伝えする次第です。何の粉飾も凝らさずありのままの気持を書くよう努力しますのでそのつもりでお読み下さい。昨年の末お会いしたときや幾通かのお手紙のなかに「済まない」「お弁当も作つてやれなくて」といつた許しを乞うようを自己責苦の言葉があつたのには戸惑いと羞恥を覚えて少々閉口しました。僕の母上について心の印象は推測されていることとは可成り隔りがあるようです。確かに母上に對する壞しさは不思議とありませんがかといって恨み憎みといつた感情は全くいたしておりません。

確かに大阪から横浜に来た二・三年の間、色々な意味で大阪にいた当時の生活が始終思い出されましたが自然とそうした気持ち時間がたつにつれて稀薄になつてましたようです。昨年末、久し振りでお会いしたときも自分ながらその心の平静なのに驚いた位です。あの時母上と話して激しいいら立ちを感じたのを覚えています。というのは母上が仰言られたのは「おばあちゃんに迷惑をかけてまで何故あんな反社会的運動をするのか」とい

うことの繰りかえでした。拘置所に始めて面会に来られたときも“運動を止めなさい”の一点張りでしたね。僕が単純な衝動に止まらずすでに数年間（字余曲折の連続でしたが）運動を続けてきたのをご存知だつたと思います。それを頭ごなしにあなたは間違つてゐるという態度には一方的押しつけを感じました。これは、子供をチヤンと養育しなかつた母親には主張する資格があるとかないとかに關係なく權威（それが愛情という名にせよ、金、社会的地位にせよ）。独立した人間の自由を関係にもとづく選択としてではなく愛情という名の“押しつけ”神れあいは拒絶します。

確かに、僕がこうした運動を始めるにあたつても又、その過程に於いても家族（祖母や伯母との摩擦が、運動をやる意味を最も厳しくつけられたような気がします）

市民的生活秩序への回帰を促す為のさまざま論理（世間旗が悪くて商店にさしつかえる）運動をやるなら授業料は払えない”との対決に僕の生活過程（意識の根本的変革が最も問われたようす）。そうした意味で祖母や伯母も満足し、又僕も満足するというのは望むべくもないよう思えます。それでも家族

内での対立がないとすれば家族の人達に理解があるのか、国家体制の変革を求める“思想”そのものに問題があるのかのどちらかだと思います。一郎氏のお手紙のなかにあつた。（母の再婚の相手）「修身齊家治國平天下的」というのは、國家反逆の意志や家族的紐帶にしばりつけようとするアジア的專制国家に於ける支配者のモラルに他ならないと思います。又、同文に「こ

の地上の同じ地域に生けた先生、後生として、特に君と私が坐して大いに日本の現在を、将来を、悠久の過去を論じたいものです。

内容には政治や思想といつたものに対する二元論的立場がうかがえるようです。僕が現在、政治に係つてるのは男のやる仕事だというようなヒロイックな觀念や単純な正義感からではありません。そして、又口角アワを飛ばすための材料として政治を問題にしているのではないことを御理解下さい。

僕を政治的行動に駆りたてるのは生きていることの非实在感であり、そうした僕へと強制して止まない現実との斗いであると認識しています。ですから、現国家に対する僕の斗争姿勢は必然的に現実生活の偽瞞、妥協、退廃無力廢を排する僕と統一されていなければならぬと思つています。

少々理屈ボクなつて恐縮ですが……（略）  
&&&&&&&&&&&&&&&&&&&

## 八月二八日 東拘 より

奥 津 久 男 （理共斗）

&&&&&&&&&&&&&&&&&&&

眞崎猛哲君 & 東大斗争獄中書簡集発刊委員会御中

以下の手紙をできるかぎり早急に次の書簡集に掲載されることをおねがいする。その理由は以下の行記で明きらかとなるだろう。書簡集第十三号の最後の手紙の筆者に對して、解放派の立場から一言したいと思いつつも、氏名が黒インクで塗りつぶさ

れ特定しえぬので、有効的内容を明確に打ち出すのにどうか、とためらつていた。折りから第十七号にブント系の学友及び中核系の学友二名が第四、五、六に於て、それへの批判を開示しているのでこれらの学友への反論をとおして一三号の筆者に語りかけていくといふことでベンを執ることにした。僕は一ブロレタリア戦士。なお第六の筆者はそれと分る書き方をしていなが、NISではないと自ら断わつており、かつ宇野経済学に全的に依拠した語り口をなしているので中核派だろうと特定した。

(A) まづ、第十七号第四のブント系の学友に。こうした単純反撲と自己の貧弱さをインペイする為の自己絶対化の衝動とストレス解消の為の悪罵とレツテルはりに対しても応じようとするほどのヒマ人やあるいは「純真な」人間がいるとしても思つてゐるのか？ この筆者に對しては、もしシャバにてたらできるだけ人気の少ない浜辺に行つて海へ向かつて「俺は革命家だ！」と叫んでみることをお勧めする。何故人氣の少ない浜辺に？ それは五〇ベンも叫んでみたら気がはれてグッスリ眠れるようになるだらうし、そうした自己の行為を何物にも妨げられず純粹に進行せしめる事ができるから。批判を行わんとするならその対象を批判的にかつ全体的に把えんとする努力は前提だらう。我々は他派のそうした我々に対する努力をはじめからゼロと想定するほど自己絶対化の衝動に充ちた宗派ではない、我々は、日共スターリニストからの批判に対しても、またブルジョワ階級の批判に対しても

らもそこに学び教訓化すべき点を見出しができる。もちろん論言うまでもなく、この筆者の文からも教訓となすべき点を見出しだものだ。それは何か？ 我々の理論宣伝はまだまだ弱体であり徹底して強化されねばならない、あらゆる機会と手段を活用して「我々の意図と見解はこうだ。これを理解せよ！」と他派（とりわけブント諸君）の耳もとでどなりたて、何度もくり返して叩き込んで行く、これが必要なのだ。そうすれば対象を正しく把えた批判のこだまが返つてくるだろうと期待するほどの人好しではないにしても、それぞれの批判が何に起因するのか、無知に起因するのか、ストレス解消の衝動にか、あるいは政治的デマコギーの悪しき意図にか？ それらが少くとも一定の客觀性をもつて明確となるだろうから。一三号第四の筆者との対応は別にしてもブントそのものの歴史的意義と限界、その総括と止揚のための方針提起の作業、これらは、我々にとつても七〇年斗争のただ中で急務の課題として位置づけられるであろうし、その作業を我々は実践的かつ理論的になしとげるだらう、この筆者の目に見える形でそれがなされるか否かは別として。

なお、僕は、中核派の首尾一貫性（その内容が問題だが）とは対照的なブントの動搖性－すなわち現在のブントを一つの固有名詞として確信するほどの純情さかまたはそれからではない。ブントの下に〇〇派と付いてはじめて本体があらわされるものの複合体、したがつて、やはり一七号第四の筆者に對して正しく有効的に對応しうるか否かはまたしても僕

の確信外であつて二、三の問題点を指摘するにとどまるだけだらうが、若干内容に言及した。

君達は（そして君も）「革命家集団」を「演じる」事はできても、それに「成る」ことはできないだろ。「大衆は既に動き出している・彼等にとつて必要なのはどこへ？どう？を示してくれるものなのだ」と「大衆＝彼等」についてその状態を語り、（まるで自分は大衆とは全く別の地点に立つてゐるかのようだ）「大衆＝彼等」が待ち受けているのはまさしく「我々」なのだ、「我々」は彼等の前に登場せねばならぬのだと、（こうした「確信」を美化する藤本進治の組織論について別な場所で別な形で述べたるだらう）といふほほえましい自負は結構なことだが、そう叫ぶ「我々」はどこから来たのか？どこへ行くのか？少しも分つていなければ、あんまりに「大衆＝彼等」がどこへ？どう？すべきかについては何もかも手に取るように分つてゐるのだと思ふんでいるくせに。汝自身を知れ！「マルクスが……狂い死んでいつた、というその情念を継承するのだ」といかにも「革命家」的に語つてゐるが、こんな語に口は少しも新しいものではない、陳腐な酔つぱらいの叫びでしかない。本氣でこんなことを思ふこんでいるのか（だとしたら、ブルジョワマスコミのおはやしをバツクラウンドミュージックとして演じられるドンキホーテ劇に他ならない。本物のドンキホーテは（ここ東拘で聞いたラジオ番組によれば）死ぬ前に生來のキハーダにもどりドンキホーテとキハーダの二重生活をキハーダとして総括し

その生をとちて行つたわけで、ドンキホーテのまま、死ねというならドンキホーテと云わねばなるまい。革命家を自称するなら何故「どうしたら勝てるのか？勝つ為の理論一力一組織は何か？」といふ間に自分の頭を没入させ「狂い死ぬ」という事を冷徹に拒否しないのか？おのれのをしつつある事がはたして勝利につながるのか否かをギリギリと問わないのか？我々は少くとも出発点に於てこういう革命的な問題のたて方をするのを拒否してきたのだけれども第四の筆者はそれをすらへだたる事はるかに遠いのだ。もちろんプロレタリアにとつての生と死とは、こんなたわ言とははるかに区別された共同社会の生と死にかかる偉大なものでありうるし、そして共産主義理論とは科学であり、それ以外の何ものでもない、といふ点についての我々の信念はゆるぎない。もちろん科学とは云つても、「労働者階級のみが唯一の科学的な階級である」とマルクスが云う意味における科学なのだが。

指導されるべき大衆が指令を待つてひれ伏しているのを見出しが故に指導部であり、「何故ならその指導部にとつて大衆とはそういう存在でしかなくまた大衆がそうでしかないが故に自分が指導部たりえその指令部としての任務があると考える」、そうした指導部が頭の上にあつて自己の生と死にかかる問題ですら司令してくれるので自分はそうした問題にかかる必要はないしむしろそれにかかるとすれば全體への叛逆であると見なれ消されてしまふので、司令のままに手と足を動かして行く大衆、こうした全くブルジョワ的な分業関

闇に新左翼にしろ旧左翼にしろ、ともかくそなたの関係を成立させてしまえばもうこちらのものだ、と考える指導部主義者ばかりだが、それでは決して勝利しえないので、とだけは、これまで流されたプロレタリアの血にかけても断言せねばならない一を労働者階級の階級運動は超えて行かねばならない。それは唯一労働者階級の運動に於て可能なのだ。それは絶対に演技ではない。またその一環として演技をかざりたてる讃歌も情念も不要だ。必要なのは自分の中に在る偉大さを強めて突き出して行く理論であり叫びであり歌なのだ。ここに於てあらゆる種類の精神労働も肉体労働もブルジョワ的分業關係の桎梏から放たれて合一一し、ひとつの巨大でかつ革命的な「生産的労働」となる。おのれの実践が、日々自分の眼の前に現前する灰色の壁と鉄格子窓を突破しうるのであるか否か、じつくりと考えよ、あらゆるブルジョワ的迷妄をしてよ、と僕は言いたい。

なお、解放派は「党がなくてソヴェートができる」と考えてゐると井難している他のブント系学友がいて、これに対しても次に「蜂起はソヴェートや大衆組織が行うのではなくて、党が指揮するのだ」と対置している。これは實にさまざま錯覚に充ちているが、（そもそも文章 자체が狂つている）党及びソヴェートの関係を労働者階級の階級形成の過程において立てる事抜きに、誰が何をやるかと論じてもきわめて御都合主義的なヘゲモニー評論でしかないのではないか。あいのう時はこうすればよい、こういう時はああすればよい、云々。

(B) 十七号第五の筆者に對して。この筆者はきわめて政治主義的に過去と現在を描き出し、そうすることによつておのれ自身の、正しく現実を見る目をはじめからくもらせてしまつてゐるとともにそればかりでなく、そうしたおのれの限界を大衆に対して押しつけんとする点に於て重大な問題をはらんでおりその意味に於て一貫している。そもそも中核派は十・八以来の斗争を激動の七ヶ月だとかムード的に総称しそれぞれの斗争の意義と限界を抱えて行く作業をあらかじめ放棄してきただばかりか、おのれの「路線の正しさと戦斗性」を単純に賛美し押し出して行くという宗派主義的傾向を純化してきた

じ（もち論、路線そのものの革命的批判がなされねばならぬ）が）その延長上に労働者大衆に武力戒厳令を施行するといふ六・一五問題が生じてきたにも拘わらず、現在ではそれへの本質的総括を解放派に対する悪しき非難にすりかえて回避し正当化するという傾向が色濃くあらわれている事は今后とも第二、第三の六・一五がなされる可能性を完全になくしたとは云えぬものとして警告が発せられねばならぬと思われる。いづれにせよ、この筆者は一貫した態度をもつて、すなわち「自分自身に対する完全に無批判な」自分自身の正しさについての厚かましい思い込みをもつて、佐世保斗争を描き出し、あるいは東大斗争に於ける我々の対R.M.斗争を非難しているが、こうした態度をもつて「批判の基準は実践である」といつても民衆が云つてゐるのと同じくらいそらぞらしく説得力を有しないのは当然であろう。第五の筆者に対する反論はもちろん中核派への全體的批判を含まねばならぬのは当然だが、批判の基準はまさしく実践なのであつてこそはその場ではないだろう、二、三の興味ある問題についてすることにしたい。筆者は「資本主義的奴隸關係を断ち切る」ということは、資本主義機構の破壊を通してのみ可能であるという事はいうまでもない」と片付けてしまつてゐるのだが果してそれでよいのか？クロカンは「スターリンが、ブルジョワ革命はすでにそれに先行する封建制社会の中でのブルジョワ社会の進行、という事態を有している、が社会主義社会はプロレタリア権力の樹立をもつてはじめて開始される」という点にブルジョワ

革命とプロレタリア革命の相違があるのだ、といつてゐるのはその限りでは正しくないのだ」と云つてゐる。スターリンは正しくかつこの限りでスターリンは正しいとするクロカンは正しいのか？これは労働者階級の階級運動の内実に関する、共産主義とは何かというおよそ生命を賭して守らるべき原則に関する問題を含む。確かに実現されたものとしては（社会革命は、政治的権力の奪取と支配階級への自己形成をテコとして現実に開始される。ましてや）共産主義社会（第一、第二両段階を含めての）の実現は将来に属する、しかし我々の斗いにとつては永遠に今ある。現在の今のこの直下に新たなるものが存在する。現在の直下において、将来的なものが新たな質としてこの直下において進んでいる、現実的に実在的な可能性としてある。生きて存在している。そう我々はとらえる。これはプロレタリアートのコミュニケーション論としてたてられる。スターリンもそれを正しいとするクロカンも正しくない。決定的な問題において誤まつてゐる。十三号の筆者が叫びたかつたのも結局それだと思う。Aを断ち切ることはBの破壊を通してのみ可能であると云う時、誰のが如何にBの破壊をなしとげるのか、この問題をカツコの中に入れてしまえば本物の段階主義である。同時に社会運動でない政治運動は存在しないのであつてそれはブルジョワジーの政治にしても小ブルジョワの政治にしても、もちろん中核派の政治斗争にしても、我々の政治斗争にしても、それぞれの社会運動の中身を含んでいる。我々はただひたすらに、プロレタリア的社会運動を含むプロレタリア的政治運動を

発展せんと努力するだけなのである、反戦、反ファシズム、反合理化とはその斗いのスローガンを整理したものである。

革命の立場にたつという問題に関して。意識ある存在としての人間があれこれの立場を認識、洞察してどれかの立場に立とうと努める事は可能であるし、そうした  $M_0$  が現実に成立もする。だが次の点だけは明きらかにせねばならない。プロレタリアートの立場とはプロレタリアート自らによつてのみ創造構築されるのであつてそれ以外のものによつてではない。あれこれの観念や個人によつてではない。それはもちろんマルクスによつてでもレーニンによつてでも創造されるのではない。プロレタリア階級以外の諸階級、諸階層がプロレタリアートの立場に立つとは、このプロレタリア階級によつて構築された立場に、自らが今おかれている現実的課題との格斗を通してはじめて可能なのであつて（プロレタリア統一戦線の形成ということ）

単なる洞察と決意によるのではない。このことはもちろん思想斗争、イデオロギー暴露、宣伝煽動の役割を否定するものではなくむしろそれらの正しい内容を示すものである。前項の問題との関連で云えばプロレタリア革命の「現在性」とは（現実性ではない）革命はそれを決意するものにとつては現実的である、という浅ばくなものではない。この資本主義社会のただ中におけるプロレタリアートの立場が現実的に開示されて行くに伴なつて（プロレタリア的政治社会運動が発展して行くに伴なつて）プロレタリア階級の党建設（地区一産別を貫く行動委  $M_1$ 、反帝学評、反帝労評、労学地区連帶委 etc.、及び社民組織内部派

斗争をとおしての既成左翼体制の破壊的止揚を一本柱として）及びプロレタリア統一戦線の構築を示される階級形成の過程が現在直下に進行する事を指すのだ、まさしく現在的にノーそれは我々プロ統派の手によつて担われつつある。我々を社民と呼ぶことによつて、自分を欺き他人をも欺むかんとする者は、そらする事によつて我々の  $M_0$  を消しさる事は決してできないばかりか決定的に現実によつて罰せられる時が必らずくるであろう。極論すればマルクス・レーニンを読み、革命の立場に立とうと決意し、突撃したとしても、プロレタリア革命の立場に彼が現実に立つてゐるか否かは全く別な問題なのだ。ましてそうした問題を欠落させた自分に無自覚をばかりかその自己の立場を絶対化し、労働者大衆に武力戒厳令を施行して自己の意志を強制せんとする事は、プロレタリア革命の立場とははるかに異なる問題である。

筆者は「自分が学生であること、研究者であること、それが必然的に奴隸關係から自由でありえぬとともによりいつそその関係を強めている。」精神労働者予備軍としての自己に無自覺な日常生活がいかに帝国主義秩序をさえ、自分を含めた大衆を抑圧するのに大きな役割を果たしてきたか反省せよ」と御議宣をたれてゐる。それこそまさに一三号の筆者がすぐれた感性をもつて批判を注いでいるのであつて、僕がそれにことさらにつけ加えるまでもない、もう一度一三号を読み返したまえと云いたい。かかる常識的非革命的発想法について言及したい。一体こうした「加害者としての自己存在を拒否せよ」（以

下—加害者理論と略）という考え方には歴史的にはどうした時期から大衆的に生まれてくるようになつたのか僕にはよく分らない。（分裂前のマルクス主義機関誌などには、科学技術者運動論における加害者理論が色濃くあらわれてゐる。）簡単にその基盤を云ふれば、高度成長期に於ける資本制社会のダイナミックな膨張・発展の中での、小市民やそれに擬制した精神労働者層の何にでもなる、何でもやれるという幻想がもぢうるほど現実的生活基盤の拡大へもちろん人は何にでもなるわけではない、歴史社会的階級的に制約された存在である、肉体労働者はかかる幻想にムエン）が帝国主義的工場制度とそれを基礎とする社会分業秩序の再編、確立運動の開始に伴なつておびやかされて行くかかる諸条件のもとでの小ブルジョワの動搖と不安というのが加害者理論の基盤をなしているのだろう。この加害者理論については、それぞれが打ち出される領域別に問題をたてて行かねばならない。精神労働者論に關して、あるいは政治斗争に関して<sup>etc.</sup>政治斗争の局面に於ては、平連一構改系と中核派の政治主張に最も強くあらわれる。（いわく沈黙することとは……日常生活こそが……云々。）こうした論議を極端化するところである。

ある人が生まれたばかりの赤ん坊に向かつて「お前は消費者としてミルクやおしめカバーやオモチャを消費する。こうしたものが存在するからミルク資本、おしめカバー資本、オモチャ製造資本<sup>etc.</sup>が存在しうるのだし、国独資段階における国家権力の育児行政を通しての介入も強化される。おまえが成長して労働

力市場に立つこととなれば労働者階級の永続的再生産という資本の意図を貫徹させることになる。生れたばかりの赤ん坊よ、お前の存在こそまさしくプロレタリアートを奴隸存在たらしめているのだ！」と呼んだとすれば人はその人間の頭を疑うであろう。しかし、その赤ん坊が恐しく早熟であつて以上の言葉を一人称で語つたとしたら（自分は……云々）それを批判するどころか本氣でその赤ん坊を「斗う民衆」とあがめてしまう者が多いのだ。ましてやそれにあやからうと自分もまねをするにいたつては、生れたばかりの赤ん坊は、それを生産する個人的結合が、一同同団体の成員としての結合であるが故に、その共同体の生れながらの成員として、まだ労働するまでに成長していくべくても一定の自然 土地、生産手段、自己の身体<sup>etc.</sup>と特定の所有関係にはいるのである。赤ん坊は財貨の生産においてすでに成立している所有関係を所与のものとしてうけとめるのである。したがつて彼の意志から独立した生産関係として、赤ん坊はその中へ包摂されてしまう。それこそがとりもなおさずまえもつときめられたこの赤ん坊の一定の客観的定在、その存在様式に他ならぬ。なお、人間にとつてその人間の肉体、身體的組織の定在は、男女両性の社会的かつ自然的結合の結果としてあるのであつて、その人間によつて生み出されたのではない、かれ自身の自然的前提としてあらわれる。（以上、田中吉六、二種類の生産論参照）、加害者理論は何に対しても斗うのか何を解決止揚していかねばならないのかを決して明きらかにしないし、ましてそのワク内での自己否定論はどこまでつきつ

めてもこの資本制社会をつらぬく労働力商品市場に微動に打撃を与えることはできない。(以上のことは加害者論が打ち出されてくるそれぞれの領域でさらに深化されつつ解明されて行かねばならないのは当然だ)ここでマルクスを長々と引用し、商品の二要因から労働の二重性へ、価値生産と使用価値生産、労働過程と価値増殖過程、生産過程一般と資本による生産過程、価値増殖の為の資本家の目的意識性と、その動かしがたい指令の下におかれた労働者の使用価値生産の為の合目的的作業に向けた意識性、その他もろもろの区別されかつ資本の優位に於ける統一としてとらえらるべき両極を混同してとらえマルクスを歪める事のないよう(マルクスに語つてもらう事はかんたんだが、長々と書いてきたのでもう腕がつかれてしまつたし、資本生産過程論そのものを論じる事抜きにこの加害者理論(こんなものが横行することに對してだけでも日本のすべての自称左翼は「自己否定」せねばなるまいよ)を止揚する事はなしえぬ。から他日を期す事にする。マルクスはこんな無内容な「主体的アジテーション」を必要とはしないほどラディカルをつたのだ。

この筆者の產学協同路線の理解はまるでなつていないと以上何も云う気が起らない。

レーニンの国家と革命の中で、一般的な政権の奪取を主張することが問題なではなくて、今現存するブルジョワ的国家機構の破壊とプロレタリア独裁権力の新しい国家機構の創造をおしての政権の奪取、ということが問題なのだ、これを認めるか否かが問題なのだと鋭くつき出している。レーニンは國家論を評論しているのではなく、国家と革命として問題を立てている。しかし、レーニンの国家規定は決定的に不充分であり、かつ不明確である。ブルジョワ国家とは、(次に我々が何を云いだすか、ある事ができるほどに我々を理解しているものは一人もいない!)プロレタリアートの階級形成に対抗しブルジョ

ワ階級の發展のための諸条件を防衛しかつその中でブルジョワ階級のプロレタリアートに対抗的になれる階級形成的なテコとしても理解されて行かねばならない。したがつて当然にもそれはプロレタリア階級の階級形成の現段階に規定されるものとしても理解されねばならない。一の階級による他の階級の抑圧の機関、公的暴力装置としてとらえたり、それは一面的で記帳国家としての公共的側面も見おしてはならない、と「もう一つの側面」を列挙したりするのはいづれも現象論であり本質的ではない。一こういうと、レーニンを否定するのか、ともつたいぶつた金切り声がすぐな聞こえてくるようだ、レーニンの不充分性を指摘することが何故悪いのか、レーニンを否定するから解放派は社民なんだ、などという言い方に対しても「俺はマルクス主義者ではない」というマルクスの言葉を送る。レーニンを革命的に繼承するためにも帝国主義論「國家論における分業論、階級形成論、政治過程論の欠落などが克服されて行かねばならないのだ。この点で最近差し入れられた前進にのせられて陶山健一氏の「八一五革共同集会での」講演録を論じてみると、やはりたつたが、どうせこれ以上長くかいても一度にのせきれないのでだろうし、次回にまわすことにする。そしてまた第十七号(6)第六の筆者にと(5)第十三号の筆者にとをふくめて次回にのせてもらえるよう書きます。

第六の筆者は、過渡期社会論及びスターリン主義論の問題を提起しているが、マルクス主義経済学をマルクスからはじめるのではなく、宇野からはじめてしまつてるので、過渡期社会論を政策論的に理解しているようだ。スターリン主義を止揚していくためには宇野に依拠する以外にも手段はあるのだ。それではまた。

## 編集後記

「革命がファシズムか」七〇年安保、七〇年代階級闘争を目前にした現在の情況は、こう見えら  
れるだろう。

現在直下進行しつつある分割公判——獄中「被告」の「出廷拒否」——「職権保釈拒否」の斗い  
として烽火を上げている——それはブルジョア支配秩序の貫徹として、古い共同性が我々個人個人を  
分断し、我々の上に重く重くのしかかる。余りの重さゆえに我々はちつ息を余儀なくさせられるかの  
ようみえる。

出廷拒否一保釈拒否の斗いはそれ自体不充分性を有しつつ、しかしブルジョア秩序をその内部から  
喰いやぶり、我々の新しい共同性をみつめた斗いとして展開されつつある。

古い共同性が勝利するか、我々の新しい共同性が勝利するか、情況はこうなのだ。もちろん公判斗争  
 자체は部分的斗いとしてしか存在しないがゆえに、明確に七〇年安保粉碎斗争と結合せざるを得ない  
ものであると思うが。

書簡集のこの小さな空間が、ブルジョア社会の古い共同性を突破しつつ、新たな、そして強固な我々  
の共同性をささやかながら展望できるならば、この編集に関わる者としてはこれ以上に嬉しいことはないだろう。

△影丸▽

第二十一号 九月十三日発行  
発行者 「獄中書簡」発刊委員会

委員長代行 加藤二郎

△連絡先 文京区向丘一の十二の七

東大追分寮内 八一一二三六八

真崎猛哲

分離公判粉碎日程表

月 日	曜日	時 間	法 廷	裁判長	グ ル ー プ
9月16	火	10:00	503	井 口	安 田 5
"	"	10:00	701	柏 谷	安 田 8
"	"	10:00	504	浦 迂	安 田 6.1 6
"	"	11:00	303	岡 垣	神 田
17	水	10:00	702	相 沢	ラグビー 1
"	"	10:00	501		列 品 館
"	"	10:00		向 井	安 田 1
"	"	10:00		岡 垣	安 田 3
"	"	10:00	502	熊 谷	安 田 7
"	"	10:00	505	柏 井	安 田 9
18	木	10:00	502	服 部	法 研 2
"	"	10:00		門 馬	法研 少年
"	"	1:00	702	向 井	安 田 1.5
"	"	10:00	505	石 丸	安 田 20
20	土	10:00		向 井	安 田 17
"	"	10:00	701	浦 迂	ラグビー 2